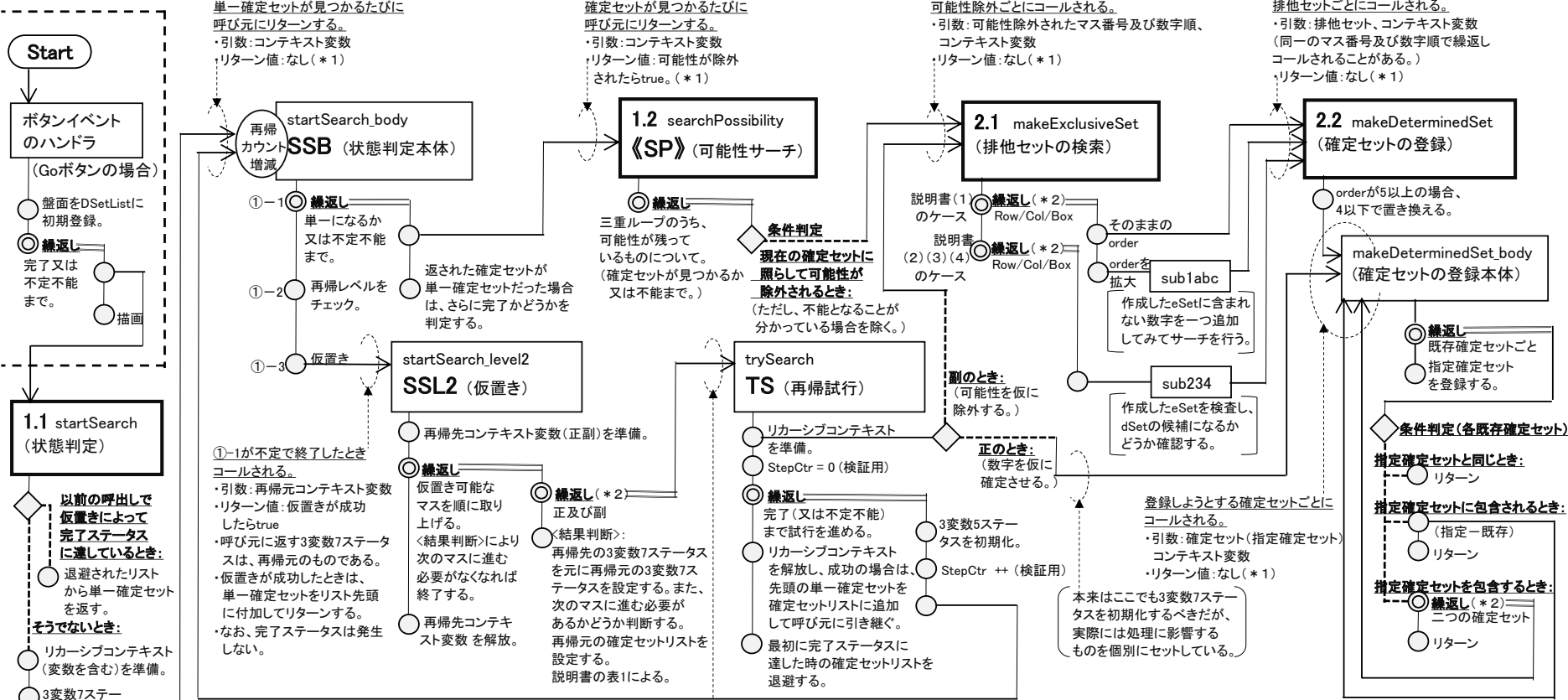


# 数独解法プログラムのプログラム構造

←-----コンポーネント: 「1. 可能性サーチの実行とその結果に基づく状態判」-----> ←-----コンポーネント: 「2. 排他関係の調査と確定セットの新規登」----->



(注) 盤面、可能性リスト、確定セットリスト、3変数及び7ステータスの13個の情報をリカーシブコンテキストといい、それを格納する変数をコンテキスト変数という。

(\*1): これらのfunctionでは、単一確定セットが見つかった場合は、そのRow/Col/Numを3変数にセットして返す。

(\*2): これらの繰返しは、ループではなく、Row/Col/Box、正副等に対応してプログラムが繰り返して記載されている。

仮置きマスごと・正副ごとにコールされる。

- 引数: 仮置きマス番号及び数字順、正副フラグ、再帰先コンテキスト変数(TSは、SSL2の内部サブなので、SSL2の変数にはアクセスできる。)
- リターン値: なし
- コンテキスト変数としては、<再帰元><再帰先>の両方を持つ。
- <再帰元>は、呼び元のSSL2と共用であり、TSでは参照だけである。(変更は、SSL2の<結果判断>で行う。)
- <再帰先>は、SSL2が変数を準備し、本functionが内容を変更する。

- ・アルゴリズムの詳細は、説明書(「数独の解法」)で説明している。
- ・太枠の4つのfunctionは、説明書でいう「代表function」である。その番号は、説明書の記述の項番1.1から2.2に対応している。
- ・SSB、<SP>、SSL2、TSは、これらのfunctionの略号である。この略号は、ソースプログラムの中のコメントでも使われている。このうちSSB、SSL2、TSは、1.1の「主要サブfunction」である。
- ・この図は、自由に引用していただいて差支えない(直接の商業目的を除く)。その際には、一報いただくとともに、潮 哲也が開発した解法であることをクレジットしていただきたい。